

平成 25 年度 私立学校初任者研修 中国・四国地区研修会 実施報告

平成 25 年度私立学校初任者研修中国・四国地区研修会は、8 月 7 日(水)～9 日(金)の 2 泊 3 日の日程で、猛暑の中、初任者教員 126 名の参加を得て広島ガーデンパレスで開催された。

初日はまず開会式が行われ、主催者の日本私学教育研究所中川武夫所長と開催地の代表として広島県私立中学高等学校協会黒瀬真一郎会長から挨拶があり、運営委員が紹介された。黒瀬会長は、いま私学教員が“変えるべきもの”と“変えてはならぬもの”を見極めて、様々な出会いの中から自らが学ぶという姿勢が必要であることを強調し、併せてこの広島の地に参加者を迎えて、平和や命の尊さを教え伝える大切さを説いた。



研修会はまず「私学教育の現状と課題」と題して当研究所中川武夫所長が講演し、現在の教育政策と私学の課題について説明し、参加者に私学教員としての心構えを説いた。次にこれを受けて当研究所平方邦行理事が、いま求められている「21 世紀型教育」について説明した。

平方理事は、知識量＝学力とみなす 20 世紀型の教育に対し、グローバル化が進む“解なき時代”の 21 世紀は、考える力や活用を前提とした知識と教育が求められていることを改めて強調した。その一例としてインターナショナル・バカロレア制度の進捗状況が紹介されると、参加者はこうした未来に向けた教育が今や身近に迫っていることに大きな刺激を受けていた。



続いて、当研究所の山中幸平副理事長が「私学の役割と私学人の心構え」と題して講演を行った。講演ではまず、現在の教職課程においては、“私学教員”をつくる制度がないこと、参加者が私立学校法を学ぶ機会がなかったことなどの問題点が指摘され、私学の公共性と自主性について法的な根拠が確認されるとともに、解説が行われた。休憩の後、修道中学・高等学校田原俊典校長が「体験的教師論」と題して、教師の資質と能力とは何か、対生徒、対保護者、対教員の対人関係における距離感とは何か、などについて自身の体験的事例を紹介しながら、翌日の分散会への問題提起を行った。



その後の夕食を兼ねた交流会では、参加者 55 校の代表教員が自校の紹介を行うなど、お互いの交流を深めた。

2 日目はキャリアコンサルタント大西恵子氏の講演「信頼を深めるマナー 伝え方・関わり方のコツ」から始まった。教員が日常的に遭遇するコミュニケーション場面では、小さな気遣いや心がけを重ねることによって教員や学校に対する生徒・保護者・地域の信頼が大きく変わることが説明され、参加者は会場で隣り合わせた教員間で実際にあいさつの仕方を工夫したりことばづかいを変えたりしながら、これらを実感した。



その後、参加者が 8 つのグループに分かれて「素晴らしい授業とは」「今直面している課題と解決」をテーマに分散会を行った。

すでに前日の講演で参加者に分散会への問題提起として具体的な着眼点が示されていたこと、事前に指導員間のコンセンサスが十分にとられていたこと、昼食をはさみ午前・午後と十分に討議の時間があつたことなどもあり、各グループでそれぞれ積極的な発言や活発な討議が行われ、終了予定時刻を超えて充実した分散会が行われた。





3日目は、学校法人喜田学園理事長でマスタープラクティショナーの喜田紘平氏が「発達障害についての理解と実践」と題する講演を行った。喜田氏は、学習障害(LD)・多動性障害(ADHD)・自閉症・アスペルガー症候群などの発達障害について、その症状を解説するとともに教育現場での対応方法について教員が心得ておくべきことを説明した。教員が専門的な知識をもたずにこうした生徒に対応することはもはや不可能な現状をかんがみれば、この講演は参加者にとって時宜にかなったものであり、教育活動への大きな助けとなったに違いない。



最後は、元向上高等学校・自修館中等教育学校校長の清水秀樹氏と緑ヶ丘女子中学高等学校顧問の谷澤榮司氏による「生徒指導と保護者への対応」と題する“生徒指導”についての講演であった。まず清水氏は教育基本法改正とともに取りまとめられた生徒指導提要を紹介し、「生きる力」を養成する新しい時代の生徒指導の在り方とその意義について説明した。また谷澤氏は、昨今教員の頭を悩ませるクレーム処理を取り上げ、その具体的な対応方法と教員の心得について説明した。「この困難な時代によくぞ教員になってくれた」という清水氏の講演冒頭の言葉は、参加者への強い自覚と自負を促したにちがいない。

閉会式ではまず黒瀬会長が挨拶に立ち、講師・運営委員・参加者ら関係者に謝辞を述べ、続いて平方理事より参加者代表に終了証の授与が行われ、3日間の研修会を無事に終了した。

